



iwork-pro.jp

クリックして
Webサイトへ
アクセス

アイ・ワーク News

iwork News Vol.22



自分の意見を持って、 他者と話し合う力



“糖質捜査官”
WEBディレクター 川出
K.KAWADE

「地震の被害によって改善された道具やしくみを調べよう」

中学生の息子の理科の宿題です。頭を抱えて、web検索を始め、耐震基準が1981年に変わったことにたどり着きます。建築基準法のページに行って長文を読もうとしましたが諦め、ゲームに逃げます。しばらくすると、またwebで調べています。1978年の宮城県沖地震で家屋倒壊の被害が大きかったことから、震度5まで耐えられる基準から、震度6-7程度まで耐えられるものに変ったことにたどり着きます。そこでまた動画に逃げ、うんうん言いながら文章化しておりました。(正確な調査ではありません。悪しからず。)

もう随分前のことなので、自分が中学生だった時の、苦手な理科の勉強は思い出せませんが、暗記がメインだったように記憶しています。学ぶ意図もわからず、メンデルの法則、フレミングの左手の法則などを詰め込まれた記憶しかありません。

息子の教科書を見ると「探求」という言葉が随所にみられます。そして、クラスで話し合う機会が設けられています。

暗記メインの知識しか持たず、社会の荒波にもまれてきた親からすると、「へえ～、違う人材を育てようとしているんだなあ」と羨ましかったり、「大変そうだなあ」と思ったり。

昨年は「First Year Program in KYOTO(通称FYP)」という大学生協が大学生に提供するプログラムの受け入れ企業の担当者として参加しました。大学生4名程度のグループワークを中心とした講座に、体験プログラムを組み合わせたものです。広報を主業務とする弊社では、弊社クライアントと若者の接点(SNSなど)を調査してほしい、というゆる～い課題を立てて、月に一度くらいのオンラインMTGをしております。

最初は、あまり具体的な課題が見つけれず、何度かMTGが流れていきましたが、秋も深まった頃、学生自ら、通う大学の生協のサービスに的を絞り、課題を設定してきました。Google Formで数十名に調査をし、他大学の学生とも情報交換したり、広報物も調査したり、最終的にはサービス改善策を企画書にまとめ、大学生協にみんなでプレゼンに行きました。

短期間に、学生の変身の間近に見ることができ、嬉しかったです。お忙しい中、学生のプレゼンに時間を割いてくださった大学生協の方にも、暖かいご対応に感謝しています。

先の見えない時代、自分の意見を持つこと、話し合って意見をまとめること、それを伝えて、先方とも折り合いをつけること。とても大事なことです。私は社会人になってからでしたが、若いうちから練習をさせてあげられる社会の一員でありたいと思いました。

FYPプログラムの
パンフレットです！



極

私的格言

1.2.3.4!



プロレスファン3年生
デザイナー 田部
M.TABE

あの人の言葉が忘れられない——そんな格言が皆さんにもあるのでは？
いつもは心に刺さったプロレスラーの名言をお届けしていますが
今回はプロレスから離れて番外編。
「名言」から「格言」へと変化した、仕事で大切にしている
極・私的格言について書いてみたいと思います。

1

勝利の神は 細部に宿る

これはサッカー元日本代表監督の言葉で「8割ぐらいは『小さなこと』が勝負を分けているように思う」とも。

一瞬の油断や判断ミスが失点につながり勝敗を分ける。だからこそワンプレーに責任を持つ——これはデザインにも言えることで、例えば小さな注釈でも見やすさ・バランスなどを考慮して位置等を決めます。決して「なんとなく」ではありません。8割、いえ9割以上を「小さなこと」で構成しています。

2

自分、 おもんないなあ(笑)

これは芸大の恩師・T教授の言葉です。
当時の私はゼミについてくのに必死で、与えられた課題を当たり障りなく無難にまとめようとしていました。積極的にチャレンジする、殻を破るきっかけになった言葉です。

3

仕事の60%は 情報整理と 資料収集

これは先輩デザイナーの言葉です。
制作前にコンセプトと方向性を固めておかなければ後々必ずズレが生じます。土台作りが何より重要という教えです。

目指すのは子供のような
好奇心と自由な発想

4

自我は 必要ない

これは著名なグラフィックデザイナーの言葉です。
よく、「好きなことを仕事にしていね」と言われます。ですが、好きなことを自由に行っているわけではありません。言うまでもなく、デザイナーはアーティストではなくクライアントとエンドユーザーをつなぐ役割のいわば黒子。自分が思う感覚的なことを表現するのではなく、クライアントの意向に向き合い利用者の目線を客観的に捉えるよう心がけています。

